

ヨハネの手紙第一3章22-24節 「神の命令にある恵み」

1A 豊かな祈りの生活 22

1B 責めのない心

2B 求めに応じられる神

3B 神に喜ばれること

2A 神の命令 23

1B 御子イエス・キリストへの信仰

2B 互いへの愛

3A 内に留まられる神 24

1B 命令を守る者

2B 御霊による確信

本文

ヨハネによる手紙第一 3章を開いてください。私たちは前回、3章 19節から 21節までを学びましたので、今晚は 22節から読みます。「²²そして、求めるものを何でも神からいただくことができます。私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。²³私たちが御子イエス・キリストの名を信じ、キリストが命じられたとおりに互いに愛し合うこと、それが神の命令です。²⁴神の命令を守る者は神のうちにとどまり、神もまた、その人のうちにとどまります。神が私たちのうちにとどまっておられることは、神が私たちに与えてくださった御霊によって分かります。」

22節が、「そして」で始まっているとおりに、実はここは前回の続きです。前回の学びのことを思い出しましょう。兄弟に対して行いと真実をもって愛しましょうと薦めた後で、19節、「そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安らかでいられます。」と言っています。自分が真理に属している、神とキリストの内にいるのだということを知って、心安らかでいられるのです。けれども、必ずしもそれが行えていない場合があります。心が責められます。そのことについては、20節、「たとえ自分の心が責めたとしても、安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。」ということです。神は、失敗してしまう自分も全て知っておられて、なおのこと御子が執り成しをしておられます。自分の心よりも、神は大きい方であるからこそ、私たちの救いは安定しているんですね。

けれども、立ち返る必要があります。神の命令に戻る必要があります。それで 21節、「愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。」ということです。心に責めがないというのは、とても大事です。サタンはその心の責めを利用して、私たちをキリスト

から引き離そうとします。さらに、罪を犯させようとしています。その策略に乗ってはいけません。神に立ち返り、その命令を行うところに戻る必要がありますね。

キリスト者としての特権、恵みの一つが、「聖なる、正しい神の前に確信を持つことができる」あるいは、「大胆になることができる」ということです。なぜなら、血を流して下さってキリストがおられて、神の御座を恵みの座に変えてくださったからです。「ヘブ 4:16 ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」

1A 豊かな祈りの生活 22

1B 責めのない心

そして、もう一つの恵み、心に責めがないことによる恵みが 22 節なのです。「**22 そして、求めるものを何でも神からいただくことができます。私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。**」

人間関係において、仲が悪くなれば、そのコミュニケーションに支障が出ます。それと同じように、心に責めがあれば、神とのコミュニケーションに支障が出ます。神が近づいても、罪を犯した後のアダムとエバが身を隠したように、まともに会話ができなくなるのです。「詩 66:18 もしも不義が心のうちに見出すなら主は聞き入れてくださらない。」ですから、心に責めのないということが、神への祈りにおいてきわめて重要になります。もし責めがあれば、口で罪を告白し、罪を捨てます。神との関係回復が必要です。

2B 求めに応じられる神

そして、「**求めるものを何でも神からいただくことができます。**」という、とてつもなく大きな約束が書かれています。イエス様は弟子たちに、このことを何度となくお語りになっていました。「ヨハ 14:13-14 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。14 あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしがそれをしてあげます。」「15:7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら、何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。」

イエス様は、「求めなさい。・・探しなさい。・・たたきなさい。(マタイ 7:7)」と言われましたが、私たちがそこまで求めて、捜して、戸を叩いているか？ということを想わされます。私が信仰をもって間もない時に、ジョージ・ミュラーの「祈りの秘訣」を読みました。彼は孤児院を運営していましたが、全く祈りによって、必要が満たされていく証しを持っています。彼の祈りの答えは、御言葉が与えられることです。神から答えがあれば、それはすでになえられたと信じていました。ヨハネ第一 5

章に、その約束があります。それで、詩篇 119 篇 131 節が与えられたそうです。「私は口を大きく開けてあえぎます。まことに私はあなたの仰せを慕います。」鳥の雛が、親鳥からの餌を求めて、大きく口を開けてあえいでいる、その姿です。それと同じように、彼は神からの言葉を待っていました。そして与えられたら、その後には、必ず、孤児のための食糧が、誰にもお願いしていないのに、届いて来るのです。神は、求めるものを何でも与えると言われるのです。

3B 神に喜ばれること

そして、なぜ、何でも与えてくださるのか？心に責めがなければ、とヨハネは言いましたが、もう一つ、「**私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。**」と言っています。神の命令を守っていて、それで神の喜ばれることを行っている時に、神は惜しみなく、求めるものをくださるのです。ここを、多くの人が勘違いしてしまいます。自分の欲することを願って、それで与えられなければ、この約束の通りにならなかったと見てしまうのです。ヤコブは、「4:3 求めても得られないのは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからです。」神のみこころの中にいる者たちが、神に願い求める時に、何でも聞いてくださるということです。

ヨハネの手紙第一 5 章に、この約束が書かれています。「5:14-15 何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。15 私たちが願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしていると分かります。」(先ほど、ジョージ・ムーラーの証しを紹介しましたが、まだ祈りの答えを見る前に、その答えを確信しているのは、このみことばに基づいています。)

ここで、「神のみこころにしたがって願うなら」とあります。ここにおいて、多くのキリスト者が誤った考えを持っています。占いのように、みこころを考えているのです。自分が祈ったことが、たまたまみこころにかなっていたから、それで祈りが聞かれた。みこころにかなっていなかったから、祈りが聞かれない、ということです。

私たちは、使徒の働きを日曜の礼拝で読んで行っていますが、パウロがエルサレムに行ったことが、御心になっっているのか、どうなのか、と言う議論がよくあります。これは、無意味な議論です。なぜなら、イエス様は、パウロが牢に入れられている時に、「あなたが、エルサレムで証したように、ローマでも証ししなければならぬ。」と言われたからです。エルサレムに行くことがみこころにかなっていたのか、どうかは問題なのではなく、エルサレムにいった証しをしたか、そうでないかが問題なのです。彼は行ったのです。「わたしの証しをしなさい」というのが、イエス様の命令でした。そうです、みこころにかなうとは、命令に従っているということと同義です。みこころとは、神から明らかにされている神ご自身の意志であって、それに従うかどうか？という問いであります。従っている時に、神に願ったことがかなえられるという確信です。

そして、神の命令を守っていて、「**神に喜ばれることを行っている**」と書いていますね。ヨハネは、ここに神の感情を表現しています。神は、私たちがご自分の言うことを聞いている時、その彼らを喜んでおられます。その喜びが、どんな願いをしても、かなえてあげるところに表れています。

2A 神の命令 23

神の命令が、それでは何か？ということ、ヨハネは次に明言します。「²³ **私たちが御子イエス・キリストの名を信じ、キリストが命じられたとおりに互いに愛し合うこと、それが神の命令です。**」

1B 御子イエス・キリストへの信仰

一つ目は、「**御子イエス・キリストの名を信じ**」ることだと言います。ヨハネは、このことと、互いに愛し合うことを、手紙の中で強調するようになります。例えば、5章4-5節、「**神から生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。5世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。**」信仰がこれほど力強いものなのだ、ということですね。実にその信仰によって、迫害されている人々の証しがあり、そしてその国が一変してしまったということさえあるのです。

世は、その力を最小化しようとします。映画「沈黙」においては、主人公の伴天連が、棄教して、その後死にますが、仏式での葬儀で、最後に藁で作った小さな十字架を手にしていた姿で葬られている場面が出てきます。これは、まさに監督が持っている信仰の姿です。自分の心の中で静かに持っている、私的なものとして抱いていればそれでよい。世に対して証しするな、信仰を明らかにするな、という圧力があります。イエス様が、エルサレムに入城された時に幼子たちが、「ホサナ！」と叫びましたが、その時に詩篇8篇2節を引用されました。「詩8:2 幼子たち乳飲み子たちの口を通してあなたは御力を打ち立てられました。あなたに敵対する者に応えるため復讐する敵を鎮めるために。」大きな力を持っているんですね。

信じることは、簡単で、難しいです。なぜ難しいかと言いますと、プライドがあるからです。自分の理解、自分の知恵、力でやって行こうと思うからです。そうではなく、「**御子イエス・キリスト**」ご自身を信じる、信じるという行為よりも、信仰の対象が大事で、この方をこの方として受け入れ、信頼を寄せているか？が大事であります。

イエス様は、ガリラヤ湖畔で、四千人に対してパンを備えられました。その後で、この方を王に担ぎ上げようとする動きを群衆がしはじめたので、イエス様は退かれました。そして、群衆がイエス様を見つけると、追っかけて行きました。イエス様は、彼らに言われました。「6:26-27 イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。27 なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくなる、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。それは、人の

子が与える食べ物です。この人の子に、神である父が証印を押されたのです。」イエスがすごい、ということではなく、動機がパンを食べて満腹したから、ということです。求めているものが、イエスご自身ではなく、パンがもっと欲しいと言うことでした。それで、群衆が尋ねます。「6:28 神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか。」イエスは答えられました。「6:29 神が遣わした者をあなたがたが信じること。それが神のわざです。」パンを求めてみたり、また、自分で神のわざを行うには？という、結局、軸足が「自分」になっています。そうではなく、この方を信じること、それがすべきことなのだ、ということです。

ヨハネの福音書を見ますと、弟子たちがイエスを信じたと初めに書かれていますが、復活の時になかなか、信じられない姿も出てきます。信じるというのは、簡単で、実は難しいのです。自分の考え、自分の力、自分の肉が邪魔をして、すなおにイエスを信じていないからです。そういったことも含めての神の命令です。御子イエス・キリストを信じること、これが神の命令です。

2B 互いへの愛

そして、次に「**キリストが命じられたとおりに互いに愛し合うこと**」が命令であるといえます。信じることと、互いに愛することが一対になっています。キリストを信じるならば、そこには互いへの愛もあります。また互いへの愛があるためには、イエスを信じる信仰がなければ不可能です。「ガラ 5:6 キリスト・イエスにあって大事なものは、割礼を受ける受けないではなく、愛によって働く信仰なのです。」愛によって働く信仰です。

信仰と愛がばらばらになっている時に、例えば互いに争っている時に、そこで振りかざしている信仰は、疑ってみなければいけません。この前の日曜日の礼拝で、カルバリーチャペル・コスタメサの牧者、ブライアン・ブローダソンがこう言いました。「キリスト者は実に多くのことで分裂している。けれどもキリストは分裂していない。分裂しているなら、それはキリストから目を離しているからに他ならない。イエスにしっかりと目を留めていれば、私たちは一つになる。」¹逆に、愛がないとか、いろいろ愛を振りかざしていても、実は真実の愛ではなく、偽りになっていることが多々あります。それは、真実の愛はキリストを信じる信仰からしか来ないからです。

3A 内に留まれる神 24

そして 24 節も、これからヨハネが多くを語る、新しい話題に入ります。「**24 神の命令を守る者は神のうちにとどまり、神もまた、その人のうちにとどまります。神が私たちのうちにとどまっておられることは、神が私たちに与えてくださった御霊によって分かります。**」内に留まる、という言葉ですね。神が私たちの内におられて、また私たちが神の内に留まる、ということです。私たちは、第一の手紙で「御父と御子との交わり」について見てきましたが、これは究極の交わりです。相互に留まっているのです。

¹ <https://www.facebook.com/brian.brodersen.1/posts/1209323692797670>

神が私たちの内に留まってくださる、ということを考えるだけでも驚くべきことです。天地を創造された神が内におられるのです。聖書は云わば、神がどのように私たちの間で住んでくださるかを描いていると言っても過言ではありません。初めはエデンの園です。けれどもそこから追放されました。それから、神は幕屋を造りなさいと命じられました。そして聖所の、宥めの蓋のケルビムの間から語られると言われました。イスラエルの間に住まわれることを言われました。そしてその後に、エルサレムに御名を置くと言われて、その神殿の中に住まわれました。しかし、そこに入るのは祭司のみであり、至聖所に至っては大祭司のみです。仕切りの幕があり、いけにえの血を携えることによって、ようやく入っていくことができます。主が天からシナイ山に降りて来られた時に、麓に境がありましたが、そこから入ってきたら死んでしまいます。聖なる神に近づいたからです。そのような境があるのです。

しかし、キリストが十字架に磔にされていた時に、神殿の垂れ幕が上から下に裂けました。そして、主が復活されて天に昇られました。そして神の御霊が降り注がれたのです。すると、建物の神殿ではなく、私たち自身の体が神殿となり、御霊が内に住まわれることによって、神ご自身が私たちの内に留まってくださるようになったのです。「I コリ 3:16 あなたがたは神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。」そして、終わりの日に、新しい天、新しい地のうちに、天からのエルサレムが地上に降りてきます。「黙 21:3 見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。」神が私たちの内に住まわれることが、神の究極の願いであることが分かります。

神が内に留まるだけでなく、神の内に私たちが留まるという相互の結びつきは、肉体として考えるなら到底、理解できません。霊における交わりだからそれが可能です。イエス様は、聖餐において、その交わりがあることを教えられました。「ヨハ 6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。」

1B 命令を守る者

この相互に留まる関係は、「**神の命令を守る者**」与えられます。イエス様も、弟子たちにこう語られていました。「ヨハ 14:23 だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」

神の命令を守っていないところに、キリストが留まることはないということです。これは、救われていないということではなく、その交わりが楽しめないということです。エペソにある教会は、初めの愛から離れてしまって、イエス様は悔い改めなさいと命じられました。そして、こう言われます。「黙示 2:5 そうせず、悔い改めないなら、わたしはあなたのところに行って、あなたの燭台をその場所から取り除く。」この燭台とは、イエス様のご臨在のことです。私の友人の牧師さんは、「フェイスブックで見たくないもの三つ」として、「クリスチャンの牧師批判」「クリスチャンの教会批判」「クリス

チャンの神学論争」と言っていました。²キリスト者が、他のキリスト者や教会の悪口を言っているところには、キリストはおられないでしょう。サタンならいるかもしれませんが！

しかし、イエス様を信じる信仰に満たされ、兄弟を愛しているところには、すなわち神の命令を守っているならば、そこには神が内に留まっておられ、私たちの神の内に留まっている、つまり、神がそこにおられる、ということを知るのです。事実、神の宮となっており、神の栄光が私たちの交わりを通して現れている、ということです！

2B 御霊による確信

そして、この働きが聖霊によって与えられているというのが、次です。「**神が私たちに与えてくださった御霊によって分かります。**」ヨハネは、第一の手紙の中で、ここから御霊の与える知識について話します。「4:13 **神が私たちに御霊を与えてくださったことによって、私たちが神のうちにとどまり、神も私たちのうちにとどまっておられることが分かります。**」御霊によってのみ、神についての真理を知ることができます。

私たちが、御霊が宿っている神の宮と呼ばれるのはそのためです。御霊によらなければ、生まれつきの人には理解することができないと、パウロは話しました。「I コリ 2:14 **生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。**」神の幕屋について、私たちは出エジプト記で学びましたが、外から見える姿はどす黒い、じゅごんの皮の覆いがかかっています。けれども、祭司が垂れ幕を通して、聖所の中に入れば、そこは金で覆われた板があり、また青色、白、緋色、紫色の撚糸でおられた幕が天井にあります。右には、臨在のパンの机、左には純金でできた燭台があります。信仰によって、御霊によってのみ、キリストにある神の栄光を見ることができるのです。

次回、4章で反キリストの霊について見ていきます。ここで私の個人的な証しを分かち合います。大学生の時に信仰を持ち、一年ぐらいて、大学のキャンパスに異端の教会の人が私にアプローチしてきました。その教会に一月通いましたが、ほんと靈的におかしくなりました。アルバイトをして、たった一人でいた時に、夜ですが、「それでも、お前は神の子である」という内なる声が聞こえました。内的な確信といたらいいでしょうか。それが、抜け出すきっかけでした。どんなに、彼らは理屈で、神の三位一体を否定しようが、私には関係がありませんでした。御霊によって、自分が神の子であるとの確信には変えられないのです。「ロマ 8:16 **御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証ししてくださいませ。**」

² <https://www.facebook.com/Atsushi.Kanda7/posts/3358280337611378>